

# RCCP News Letter

創刊号・Spring 2017

京都女子大学 地域連携研究センター

## 創刊によせて

地域連携研究センター News Letter 創刊号をお届けします。

このNews Letterは、京都市の補助事業である「学まち連携大学」促進事業の活動内容を、学内外の皆さまに広く知っていただくために発行するものです。

2015年10月に地域連携研究センターが発足して以来、様々な学外機関との交流が盛んになりました。その過程で、行政や企業、市民との連携活動を教育課程の中に取り込み、体系的な学びとして京都女子大学の教育に活かしていきたいと考えていた時に、京都市の本事業の募集が計画されていることを知りました。

京都市「学まち連携大学」促進事業の第1の目的は、連携活動を教育課程の中で展開することにあります。その意味で本学がめざしていた方向性と一致していたため、早速学長の下にワーキンググループを立ち上げ検討に入りました。

幸い本学が申請した「地域系女子養成プログラム（副専攻）の構築——地域社会を支える女性リーダーの養成をめざして——」が京都市によって採択され、2016年10月から事業が始動しました。

本学の事業は、そのタイトルから理解されるように、地域社会のリーダーとして活躍する女性人材の養成をめざすものです。子育てや高齢者支援、子どもの教育、環境・景観保全問題など、地域社会には女性の生活領域に深くかかわる課題が山積しています。この解決に向けて、地域では多くの女性が様々な形で活動しています。一例を挙げると、ボランティア活動の参加者は、女性1634万人に対して男性は1361万人（国立教育政策研究所H25）です。その一方で、リーダーの多くは男性によって占められています。例えば、NPO代表の女性割合は22.5%、小中学校のPTA会長は12.5%、町内会長は4.5%にすぎません（平成28年版内閣府『男女共同参画白書』）。女性にとって暮らしやすい地域社会を創るためには、女性もリーダーとして地域社会で発言し、行動することが求められます。このような考えから、本事業では、地域の諸課題を女性の視点で発見し、自ら解決する実践力と組織力を備えた女性人材の養成をめざしています。

本事業は、①連携志向型教育プログラムの構築、②正課内外での連携活動の展開、③「京都ネットワーク協議会（京女ラウンドテーブル）」の

組織化、の3つの事業から成り立っています。連携活動を教育課程の中に取り込むことによって、地域社会と連携活動に関する基礎知識および地域社会の課題発見に必要な専門知識を修得し、社会の中で様々な構成員とともに課題解決をめざす実践活動を行う、という一連の過程を体系的に学べるプログラムを構築しました。このプログラムの根底には、大学という教育機関でこそ実施できる連携活動を構築したいという思いがあります。学生が、連携活動の実践を通して、自らも社会の構成員の一人であり、暮らしやすい社会を創るには自ら活動する必要があるとの当事者意識を学んでほしいと期待しています。

地域連携研究センターが発足して1年6か月、本事業がスタートして6か月が経ちました。短い期間ではありますが、様々な学外機関と連携関係を結ぶことができました。また本事業の中核である連携志向型教育プログラムを2017年度より、全学対象の共通領域の中に立ち上げることができました。しかしながら連携先等との具体的な活動はまだ端緒に終わったばかりです。このため今回のNews Letterではごくわずかの活動内容しかお伝えすることができませんでした。連携活動は、異分野間の交流によって、予想されなかったような展開が生じることに面白さと利点があります。第2号を発行するまでには、多彩な活動が展開されていることと思います。どうぞご期待いただきますとともに、京都女子大学の連携活動になお一層のご協力ご支援を賜りますようお願いいたします。

京都女子大学 地域連携研究センター長

竹安 栄子



京都刑務所との連携

## 木工製品デザインの提案

矢野 真 教授

発達教育学部 児童学科

京都刑務所 処遇部作業部門 首席矯正処遇官（作業担当）

### 植田 一彦様 インタビュー

京都女子大学 矢野ゼミとの連携について感想などをお伺いしました。

#### 京都女子大学から、木工デザインの提案を受けることになった経緯は？

植田：平成28年7月27日付けで交わした連携・協力に関する協定書の中に、「刑務所内の作業場で製作される木工製品のデザイン提案」という内容があります。それは、竹安栄子地域連携研究センター長が、包括連携協定を結ぶ前に、刑務所の見学に来られた際に、製作していた木製カスターネットを見て、「なんか、かわいくない。女子大生の感性や発想を活かして、何とかかわいくできないか。」と思われ、それなら「デザインを無償で提供してもらえるとありがたい。」という要望に応じていただいたことが、きっかけです。

#### 刑務所で製作されている木工製品について、教えていただけますか？

植田：京都刑務所の木工工場では、受刑者が木工製品の製作に取り組んでいます。作られる製品は、いわば、数少ない受刑者と社会の貴重な「接点」ともいえます。作品が売れると、社会に受け入れられたと感じて、励みに思う受刑者も多くいます。受刑者が製作する作業作品のひとつとして、動物の顔をモチーフにしたカスターネットがあります。本来、カスターネットのデザインは、当所の作業専門官という作業技官が考案し、それを受刑者に製作させています。製品は、口の中に入れても安心・安全な素材や塗料などを使ったり、また、幼児が触っても怪我をしない作りになっています。

#### 提案を受けたデザインをどのように製作されるのですか？

植田：平成29年2月15日に発達教育学部 児童学科矢野ゼミの学生さんから20点のデザイン提案を受けました。この時は、KBS京都からの取材もあり、刑務所と女子大という異例の組み合わせの連携が、注目されていることを改めて感じました。いただいたご提案から数点を刑務所に持ち帰り、作業専門官が特にその中から1点「ハリネズミ」を選び、今回、試作品を受刑者に製作させました。

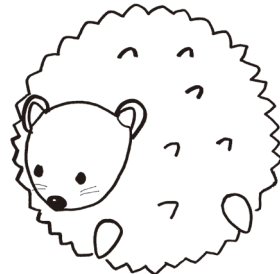
製作方法は、まず、提案デザインをそのままスキャナーで取り込み、直接カスターネットの原版にコンピューター内蔵のレーザー加工機が彫りこんでいきます。あとは、「ハリネズミ」の原型になるよう、受刑者が周りを手作業で削ったりサンドペーパーで磨きを掛けて仕上げます。



KBS京都による取材の様子(デザイン提案の場面を撮影中)

#### 京都女子大学から提案したデザインは如何ですか？

植田：いままで、作業専門官が考案したデザインは、全て動物の顔のみをモチーフにしたものばかりでしたが、今回の「ハリネズミ」は、全体像を反映したカスターネットで、その斬新さに、女性ならではの発想だと感動しました。加えて、イラストというか、そのデザインの可愛らしさとどこことなく愛嬌がある「ハリネズミ」の顔に思わず見とれてしまいました。



採用された「ハリネズミ」のデザイン画



試作品「ハリネズミ」のカスターネット

#### 今後の展開を教えてください。

植田：先日、矢野教授から3月15日を期限に、第2回目のデザインを公募している旨の連絡がありましたので、追ってデザインの提案を受けて、さらなる新作に期待を寄せているところであります。

### 作品を通してコミュニケーションを図る

発達教育学部 児童学科 矢野 真 教授

今回の京都刑務所との連携については、本来の児童学科のめざす教育内容とかなり違うと感じる方が多いのではないかと思います。私自身も、最初は児童学を学ぶ学生が刑務所との連携で何ができるのかという不安で一杯でした。ただ、ゼミを中心とした児童学科の授業において、保育に「木育」を導入することの大切さを感じながら、木を中心とした実践教材に取り組んできました。それが他の保育者養成系大学にはない特色が出ると考えたからです。「木工デザイン」として、しかも子どもたちが使うカスターネットのデザインを制作することは、まさに学生たちが「木育」を考えるよい機会をいただいたと考えています。美術系大学の学生がデザインするのではなく、保育者をめざす学生がカスターネットをデザインすることは、デザインそのものは完全ではないかもしれませんが、それを楽しく使う子どもたちの笑顔を想ってデザインするという点においては、美術系大学の学生たちにも決して負けないと私は考えます。学生たちも作品の実現化にワクワクしながら、デザインに取り組んでいます。このように、普段は接することのない刑務所の受刑者の方々と“作品を通してコミュニケーションを図る”ことは、地域との連携を考えることは勿論のこと、造形に自信を持った保育者の育成という視点からも、大変重要な連携であると考えています。今回の連携における効果が、卒業制作にもしっかりと生きてくることを願っています。

デザイン提案には、「あなたが作る製品のために、女子大生が一生懸命デザインを考えた」というメッセージが受刑者に伝わり、自分たちは社会から排除されているわけではないのだということを少しでも感じて貰えたらという思いが込められています。

また、平成29年度、前期の地域連携講座では、「負の回転ドアを考える」というテーマで、京都刑務所から講義いただくことになっています。

京都刑務所×京都女子大学という異例の組み合わせは、互いが「社会とのつながり」について深く考える機会となり、異質のものが組み合わせられ、思わぬ化学反応を生み出すように、新たな展開が期待されています。



弥栄自治連合会「すこやか学級」での連携

## 健康づくりのための呼吸法

ガハプカ奈美 教授

発達教育学部 教育学科 音楽教育学専攻

2016年度ガハプカ先生には、「呼吸法」の指導を刑務所と弥栄自治連合会「すこやか学級」で実施するなど、連携活動に取り組んでいただきました。今回は、「すこやか学級」での活動についてお伺いしました。

### 「呼吸法」とは、どのようなものなのでしょう？

**ガハプカ:**呼吸が変われば声が変わる、声が変われば人生が変わるという考え方が、呼吸法には、共通のものとしてあります。まず、自己について考え、すべて(素敵な自己・嫌な自己・汚い自己など)を受け入れる活動をします。簡単なようで最も難しく辛い活動です。頭で考えずに、「呼吸」を観察して少しずつ「自分」を深めていきます。図で示すと、図1のように、周囲とのバランスもとれ、より豊かな自分らしい人生になります。呼吸法から得られる「自己肯定感」・「自己発見」は「生きている誇りにつながる」と考えます。「呼吸を通して自分を知る」「呼吸と身体の動きで自身の身体を知る」「呼吸と声で自身の身体と出会う」といったことでしょうか。私は声楽をしています、呼吸が変われば声が変わるということは、実感しています。



図1 自己と周囲のバランス

このような理論から入っても、難しいとお感じになることが多いと思います。「すこやか学級」では、①かんたん②きもちいい③つづけられるという内容で構成しました。

### 今回の「すこやか学級」で、工夫された点についてお聞かせください。

**ガハプカ:**先ほどのような理論を伝えるのではなく、健康に年を重ねたい・カラオケで楽しく歌いたい・スポーツを再開したい・リラックスしたいといった目的をまず、わかりやすく提示し、「呼吸法」に興味を持っていただきやすくなりました。次に、・つまづきやすい・長く立ってられない・ふらつく・手足が冷える・寝つきがわるい・イライラするといった症状を感じられることはありませんか?と自分にとって身近な問題を考えてもらうようにしました。

そのあと、やってみましょうということで、耳をほぐす、手と腕を使って鼻から息を吸って、口から息を吐くというやりやすく簡単にできる呼吸法や、歌いながら、足をほぐしたり、(もしもし、かめよ)の歌に合わせて手指を動かしたり、楽しくできる方法を取り入れました。

### 参加されている高齢者の方の反応は如何でしたか？

**ガハプカ:**最初、お伺いした際には、「一体大学の先生が来て、何を話されるんだろう?」という警戒心、「この人は一体誰なんだろう?」という緊張感を持たれている方が多いことがわかりました。このような緊張感をほぐすのが、呼吸法なのですが、「最初のハードルが高いな。」というのは正直な感想としてありました。ある程度、呼吸法を勉強している大学院生にとっては、呼吸法を通じて、お年寄りと触れあい、また、「すこやか学級」を運営されている地域の方々と話したりする機会が、将来、自分が指導する立場となった際にとっても貴重な経験になると考えました。アシスタントとして、時間が可能な限り、参加させることにしましたが、その院生たちからも、「先生、本当に、私たちは望まれているんでしょうか?」「知らない人が来て、分からないことをさせられて、若干迷惑がられている気がした。」といった感想が、初回の反省会では聞かれました。

### その後の経過で、高齢者の方の変化はみられましたか？

**ガハプカ:**皆さん、初回から、前でやる私の動作を真似て取り組んでいただけたので、やってみると、何となく身体がポカポカ暖かくなるとか、気持ちいい



ガハプカ先生の呼吸法の様子

といった感覚は、実感していただけたのだと思います。今回は、12月から毎月1回、合計4回の講習を行いました、少しずつ、警戒心、緊張した関係は、変化していきました。大学院生たちも、3回目ぐらいから、「やっと認めて貰えてきたような気がする。」という感想を持ったようです。毎日続けてくださいいねということで、呼吸法をやったかどうか、簡単なチェックシートを初回にお配りしました。今回5回を終える時に、「毎日、やっていますか?これからも続けてくださいね。」と伝えると、「あー、毎日やってる、やってる。」という声が自然にざわざわとあちこちで、聞こえてきたり、「秋には、また、来ますからね。」と言うと、「えー暫くお休みなの。」と残念がってくださる声が聞こえてきたり、たった5か月ですが、変化が実感できて、嬉しかったです。

### 大学院生の方は、1月のお正月の時には、お餅つきのお手伝いにも参加いただきました。地域との触れあいについては、どんな感想をお持ちでしたか？

**ガハプカ:**自分たちは、何をやればいいのか、何を求められているのか、最初は分かりにくいところがあったと思います。呼吸法の講習だけやっていれば良いというのではなく、いろいろな地域から求められていることに、答えないといけない場面があります。例えば、他の方が講演される手遊び歌に参加するよう要請されたり、難題もありましたが、それが良い勉強にもなったと思います。最初は、お年寄りの間に入って、動作を見せるだけで、自分たちから声をかける場面は少なかったのですが、「お上手ですね。」と声をかけると、お年寄りの方が、嬉しそうにニコニコと答えてくださいます。そのような反応を見て、緊張した関係をほぐすには、声かけも必要だと感じてくれたと思います。私も一緒に学ばせていただきました。

### 最後に、前期の間、ご担当いただきます外国語準学科 劉小俊先生へのアドバイス、今後の方向性についてご意見があればお願いします。

**ガハプカ:**地域の方々と関わり、今回感じたのは、信頼関係を築くことの大切さでした。たった5回の講座でしたが、最初と最終回では、運営されている方、受講される皆さんの受け止め方が、かなり変わったように思います。受け手の方の様子をよく観察しながら、皆さん楽しんでやっていただけるように臨機応変な対応が必要だと思います。そういう意味では、私の方も勉強させていただきました。劉先生にも頑張っていたいただき、地域の方との信頼をさらに高めていただきたく思っております。

## 「中国語」の講習を始めるにあたって

外国語準学科教授 劉小俊先生にお伺いしました。

中国語には、p,tなど有気音と言われる発音があります。まさしく、これは「呼吸法」と同じく、吐く息を意識するものです。そういう意味では、呼吸法の後に、この講座があつて、良かったと思います。一緒にお腹から声を出しながら、お勉強、学習というイメージからは離れ、元気に楽しくやっていただきたいと思います。例えば中国で伝わる夜寝る前にやると良いと言われる簡単な健康法、手首と手首をトントンと叩くというのを中国語で1、2、3、と掛け声をかけながらやってみたり、日本での体験談をお話したり、次回は、何かな?と楽しみにしていただけ、興味を持っていただけるように進めたいと思っています。中国からの観光客が多いという立地に住まれる方には、少しはわかる言葉があると便利かもしれません。その辺りも、皆さんの反応を見ながら、難しくないように覚えていただければと思います。

2017年3月18日

## 祇園新橋景観づくり協議会 設立総会開催

地域連携研究センターでは、NPO法人京都景観フォーラムとの包括連携協定をきっかけに、「元吉町 まちづくり部」の定例会議に出席し、協議会の立ち上げに向けて、意見交換を行ってきました。この会では、東山区祇園新橋周辺の住民や店主らの有志が集まり、情緒あふれる祇園新橋の文化や風情を守りたいと、景観づくり協議会の立ち上げに向けて、熱心に取り組まれてきました。

2017年3月18日に開かれた設立総会では、同地区にある全建物を対象に住民、商店主、土地所有者が入会し、地域景観づくり協議会制度に基づく認定団体の申請をするための議案が可決されました。

今後、京都女子大学は、地域の景観や安全面で課題となっている通称「前撮り」業者の撮影について、業者への聞き取り調査などを実施し、いかに祇園新橋の景観を保全し、共有していくかについて検討材料の提供を行うことになっています。地域の方々とともに、世界の人々を魅了し、愛され続けている祇園新橋の景観を守る活動への参加は、京都で学生生活を送る学生たちにとっても、有意義で、貴重な体験になると考えられます。



風情ある祇園新橋の景観（辰巳橋）

## 平成28年度冬季特別公開講座開催について（報告）

主に京都市を中心とする地域における市民の教養の啓発を目的として、京都女子大学の教育・研究資源を活用した冬季特別公開講座を前年度に引き続き開催しました。

冬季特別公開講座では、統一した冠テーマ「地域とともに歩む女子大学」を掲げ、それぞれの講師の専門性に応じたテーマ設定のもとに、講座ごとに受講者を募集しました。講座については比較的に小規模な講座を想定し、開講時間も90分程度として、定年後の団塊の世代や主婦層等が気軽に受講できるよう平日昼間の開講も組み込んだものを企画しました。

また、親子で参加できる児童学科子育て支援講座もミニ講座と同時期に開催し、ミニ講座としては初の試みである託児サービスも行いました。

参加者からは「託児サービスがあったので、参加することができた。」「（親子参加型の講座で）久しぶりにゆっくりと子どもと遊ぶことができてよかった。」等、好評を得ることができました。



託児サービスの様子

### 「地域とともに歩む女子大学」講座開催内容

開催日時・会場	講座名・講題	講師
2月22日(木) 15:00~16:30 会場:A301	社会的困難を生きる若者と学習支援	発達教育学部教授 岩槻 知也
2月24日(金) 13:00~14:30 会場:A301	ふくらはぎの誘惑 —久米仙人説話追跡—	文学部教授 中前 正志
2月28日(火) 13:00~14:30 会場:A301	現代日本人の意識と若者世代	現代社会学部教授 亘 明志
3月1日(水) 9:30~12:30 会場:U101(幼児教育棟 1階 子育て支援ルーム)	【児童学科子育て支援講座】 「心をほぐすアートセラピー —かたち・色・コラージュで遊ぶ—」	発達教育学部教授 古池 若葉
3月4日(土) 13:00~14:30 会場:U101(幼児教育棟 1階 子育て支援ルーム)	親子人形劇講座 —スカーフで作る糸繰り人形—	発達教育学部准教授 松崎 行代

### 編集後記

創刊号となるNews Letterに何を掲載するかを話し合った結果、創刊号では、活動実績の具体例をいくつかTopicsとして取り上げ、少しでも多くの皆様に地域連携研究センターの活動を知っていただき、賛同していただければと考えました。原稿を作成し終わり、活動を通じて、大学のもつ専門性や知識といったシーズと、地域課題であるニーズをいかにマッチングさせるかが、大切であることを改めて実感しております。これからも、地域課題にアンテナを張り、学内はもちろん、産業界、行政、地域の方々に、お力を借りながら、ともに歩んでいきたいと考えております。また、このような活動への参加は、地域の女性リーダーとなる人材の育成（地域系女子＝チケジョ育成）のためには、大変貴重な機会であることも実感しております。そのためにも、学生の参加を促すような取り組みにも、地域連携研究センターでは、注力していきたいと思っております。これからも皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。（M.O. T.I.）

**RCCP**

The Research Center of  
Community Partnerships

編集・発行

京都女子大学地域連携研究センター  
京都市東山区今熊野北日吉町 35  
TEL.075-531-7080  
Mail: renkei@kyoto-wu.ac.jp  
URL: http://rccp.kyoto-wu.ac.jp